

平成30年度 日本大学文理学部個人研究費 研究実績報告書

所属・資格 教育学科・助手

申請者氏名 内海 美由紀

| | | |
|---|---|--|
| 研究課題 | | 子育てコミュニティとしての博物館のありかた |
| 報告の概要 | 研究目的 および 研究概要 | <p>本研究では、子育てコミュニティとしての博物館のあり方の重要性を主張した。ニューヨークのマンハッタンチルドレンミュージアムや、東京都水の科学館等にみられるように、博物館は、幼児を連れて出かけられる安全な場所として認識されており、子育て世帯の親からの強いニーズがあると言える。その一方で多くの博物館では、ニーズを認識しながらも、どのように親を受け入れ、アプローチすべきか模索段階にあると言える。そこで本研究では、多くの子育て世帯のニーズをくみ取るための博物館の取組みを実践・検証した。</p> |
| | 研究の結果 | <p>高崎市かみつけの里博物館では、子連れ世帯の利用が一定数あるものの隣接した古墳のある広場でピクニックをする程度の利用者が大半であり、博物館まで赴かないという課題があった。そこで、ワークシート教材「王様に会いに行く」を作成・試行した。本教材は、親子間コミュニケーションを促し、親子双方のレベルで理解を深めることを目的とするものである。検証の結果、これまでピクニックを目的に利用されていた古墳の広場が、実際に縄文人の集落跡地であり、且つ学術的に大きな意味のある場所であるという理解を促すことができた。また、教材によって子どもが古墳に興味を持ち、博物館に行きたいと親に呼びかけ、実際に博物館に行くようになるという事例も観察することができた。</p> |
| | 研究の考察・反省 | <p>本実践では、親が博物館教材の解説者となることで、子どもと共に主体的に学ぶという新しい学びのあり方を観察することができた。つまり、子どもの「ついで」ではなく、親が一学習者の立場から、博物館で学ぶという観点を見出したという点で大きな意味を持つ。また本事例は、かみつけの里博物館学芸員によって博物館学会 2018 年度第 1 回博物館教育部会で報告がなされた（於：三重県立博物館, 2018. 12. 1）。その際、特に国内において子連れ世帯の実践が少ないために親が博物館を利用しづらいと敬遠しているのでは、という意見が挙げられた。そこで今後の課題として、国内の子連れ世帯向け博物館実践の調査を進め、子育て世帯の利用を促すネットワーク作りを行っていきたいと考えている。</p> |
| 研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 | <p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>全日本博物館学会第 44 回研究大会 「来館者の「主体的な学び」の時代における学芸員の教育役割：アメリア・アレナスの対話型鑑賞法の分析から」 平成 30 年 6 月 24 日</p> | |
| 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者 | | |